都立中央図書館の在り方を考える有識者会議第２回議事録

日 時：2023（令和５）年 8 月 29 日（火） 14 時 00 分～16 時 00 分

場 所：東京都立中央図書館交流ルーム（オンライン併用）

出席者：吉見座長、浅川委員、田中元子委員、田中里沙委員、中島委員

（オンライン）浅川委員、木村委員

【吉見座長】

それでは時間も過ぎておりますので、都立中央図書館の在り方を考える有識者会議第 2 回を始めさせていただきたいと存じます。座長を務めさせていただいております吉見でございます。本日は北野委員がご欠席ですけれども、浅川委員、木村委員、田中元子委員、田中里沙委員、中島さち子委員、そして私が出席ということになっております。

最初に一言申し上げますと、今日の会議が一番大切だと思っております。2 時間ございますので、かなりのところを今日の議論の中で詰めて行きたいと考えております。

それでは、議事に早速入らせていただきます。まずは事務局よりお手元に配られている資料のご説明をさせていただきたいと存じます。事務局お願いいたします。

【事務局】

教育庁地域教育支援部社会教育施設調整担当課長の吉田と申します。本日委員の皆様にはご多忙中、またたいへん暑い中、ご出席賜り有難うございます。資料でございますが、前回の主なご意見を振り返りまして、その上で、今日議論の中心とさせて頂きたいと思っております中央図書館が担うべき機能やアクセシビリティを考慮した事例などについてご説明させていただきたいと思います。

それでは早速、前回いただいたご意見についてご説明いたします。まず、図書館の意義の観点で、「利用者が東京の作り手になっていく中で、その媒介として図書館がどうあり得るのか」、「利用者のターゲットや利用目的を明確にしたほうがよい」とのご意見をいただきました。次に、リアルな図書館の必要性という観点で、「なぜリアルな図書館が必要かを考えると良い」、「フィジカルな図書館の意味を考え、軸を定め軸に沿った体験や施設を考えることが必要」、「障害のある方や教育機会に恵まれなかった方にも、ここでしか体験できないフィジカルな体験として、気軽に情報に触れられるようにしたい。」、「どのような多機能化、機能の関係が良いのか」といったご意見をいただきました。

次にデジタル技術でございますけれども、情報系の世代交代はめまぐるしく、すぐに陳

腐化してしまうので、最先端の技術を取り入れられるよう、設備や人材、組織体制等の枠組みを設計しておくことが重要とのご意見をいただいております。

またインクルーシブの観点では、障害者に対する支援技術が高齢化や多様化する一般利用者の利益にもなり得るというご意見をいただきました。

観光について、インバウンド向けのコンシェルジュのような機能ですとか、東京のカルチャー、暮らしがわかる博物館的な機能、魅力的な建物、行くこと自体が面白い施設にする必要があるのではないかといったご意見をいただいております。都市課題につきましては、東京や日本が抱える課題は先進的な課題で、それに前向きに向き合える知性が東京にあることが希望につながるといったご意見がございました。

最後に施設の観点ですが、「建物の物理的なアクセシビリティだけでなく、ロボットやセンサー等の技術の導入を考えていくべき」、「自然地形を生かし、街と緑と図書館の関係をどう生かして行くか」、「メーカースペースの設置が世界的な流れとしてある」といったお話を頂いております。

以上が前回いただいたご意見として紹介させていただきました。

次に、これからの中央図書館が担うべき機能を、事務局の方で、ご意見を参考にまとめさせていただいております。本日こちらの、今後新しい図書館が担う機能について、さらに具体的にアイディアとご意見をいただければと思います。

（１）検討内容としまして、機能について検討するにあたり、リアルな図書館の存在意義を念頭に置きながら、リアルな図書館における多機能化、デジタル図書館のあり方についてご検討いただければと思います。リアルな図書館の存在意義ですが、行くこと自体の意義として建物自体の魅力ですとか、博物館やコンシェルジュのような機能を持ったりするなど、観光としての目的、それからくつろぎの空間といったご意見がございました。

また、体験することによる意義としては、reading disability の支援技術を活用して、多くの人が読書を体験できるほか、知性の触れ合いやフィジカル・サイバーをミックスするような体感メニューなどがございます。

これらには中央図書館の持つ資料を活用して行くことも考えられると思っています。

続きまして新たな機能に関するアイディアについて、これまでの中央図書館が注力してきた部分と、新しい図書館に追加される部分に分けてご意見をもとにして整理させていただいております。来館者について今後は子供や障害者を含めた多様な個人や国内外からの観光客になってくると考えております。

基本的サービスでは、技術の習得や創造・発信ができる場、市民による課題解決の活動を促進する場、江戸東京の資料情報を集めて展示して行く場などの展開が考えられます。

インクルーシブについては、すべての人のアクセシビリティやあらゆる言語の壁を克服していくようなサービス展開が求められてくると思われます。

デジタルについて、インクルージョンの実現や体験型展示など、様々な技術を活用して行くことが考えられます。

最後に施設ですが、魅力的な建築やくつろぎの場という視点や、センサーやロボットなどの最新技術を受け入れられる設え、セレンディピティ、偶然の出会いを促すような空間構成が考えられます。

以上が機能を検討するにあたってのアイディアとなります。

続きまして、前回ご意見いただいた事例調査や、ご質問いただいた事項についてまとめましたので、ご説明いたします。まず、アクセシビリティを考慮した事例です。一点目が自閉症の子供達を教育するためのプログラムを組んだロボットを図書館に設置した事例となります。二点目は、スマートグラスによる読書サポートとなります。三点目は施設内を道案内するロボットとなっております。四点目は北欧の図書館でバリアフリー対応についてまとめたもので、視覚障害者向けに位置情報アプリによって図書館内のトイレなどの位置情報を音声などで案内できたり、車椅子の高さに合わせ、書架が低くなっていたりする事例でございます。

次にデジタル技術を活用した体験型メニューとして、古典書籍にタブレットをかざすことでテキストとして読むことができるといった事例等三点ご紹介しております。

最後、ＢtoＢの観点ということで、中央図書館という団体等の現在の連携の状況についてのご紹介です。日本政策金融公庫などと連携しまして、起業相談イベントを実施したり、ビジネスや起業、社会課題の解決に関心のある高校生を対象に講座を実施したりしております。また、都立病院等で病気に関する資料展示や江戸時代の貴重資料の美術館、博物館等への貸し出し、周辺の大使館と連携した展示イベントを実施しております。

事務局からの資料説明は以上となります。座長に進行をお戻しいたします。

【吉見座長】

どうもありがとうございました。非常に簡潔にご説明いただいたと思います。まず今の事務局の説明に関して言うならば、ぜひご注目いただきたいのは、このパワポで言えば７ページ目と８ページ目、「２．これからの中央図書館が担うべき機能」と、それから「（３）新たな機能に関するアイディア」というマトリックスです。ここを中心に今日、ぜひ議論いただきたいと思います。この２ページの中に、前回委員の方々からお話をいただいたポイントが全て込められていると思います。前回、多くの委員から、これだけサイ

バー、オンラインが発達している社会の中で、なお、物理的な場所としての図書館があることの意義は一体何なのかということをはっきりしなければいけないという議論をいただきました。その話が、全体を貫くものとして、２番のところに出ているわけです。

そして、各論になってきたところで（３）の来館者、基本的サービス、インクルーシブ、デジタル、施設が出てくるわけで、例えば「これからの東京の作り手」や、「人間とは何か」「リカレント」等、一体誰がこの図書館の主体、使い手なのかという話が来館者のところにございます。インクルーシブに関する話も非常に重要な柱でございますし、前回出ていた自然や東京との関係は、施設のところである程度押さえられていますので、この表と、その前の１ページの中に前回の議論が集約されているというふうに思います。今日、これからの議論は、できるだけこの２ページを充実させていくというか、例えば今、縦軸で来館者から施設まで項目が立っておりますけれども、ひょっとしたらこれでは足りないのかもしれない。また、それぞれの軸に対応する新しい図書館の像として、右にいろいろ書かれていますが、これだけでは充分ではなくて、もっと他のところに重要なポイントがあるのかもしれないと言う気もします。ですので、その辺を意識しながらご意見をいただければ幸いです。

まずはそのような方向性で、自由に議論いただいて、話を詰めていきたいと思います。順番にお話をいただきたいと思います。田中里沙委員からよろしくお願いいたします。

【田中里沙委員】

よろしくお願いします。前回の議論においては、とても楽しく夢が広がるような話を皆さんでさせていただいたところ、このように整理をいただき、また頭の中がクリアになったところでございます。様々な体験、体感ができるリアルな図書館の形というものをどう捉えるかは本当に重要なところで、問題意識が高まります。図書館には、役割や機能が定義され、四つの機能等がよく言われますが、まずそのベーシックなところは新たな図書館のあり方の中でどう捉え、その枠組みや形をどう変えていこうとしているのか、そこにどういうイノベーションを起こそうとしているのかという観点は、まず大切にしたいと思います。情報収集機能、および情報公開の機能を長年担ってきた都立図書館は、世界の図書館のあり方をどう変えていくのかということへのチャレンジの機会にもなると考えます。

２つ目はここに来館者とありますが、対象者をどうするかという議論は、図書館を取り巻くステークホルダーになりますので、来館者以外にも来館者予備軍とか図書館を支えてくれる方、あるいは図書館で働く方々の位置づけや役割もとても重要です。関わる方々が今後どのような役割を担っていくか、対象者をどう広げるかの検討を大切にしたいです。

そしてもう一つはポジショニングで、都立の図書館と区立の図書館、民間の図書館等が存在する中で、それぞれが、社会の中でどういうポジショニングを有しているか、その中で、本図書館はどういうポジションを取っていこうとするのかも検討の余地があるかと思っています。ご案内のとおり、街には書店がどんどんなくなってしまって、図書館への期待は、別の形で出てきているのかもしれないし、それが 10 年後 50 年後どうなっていくかという予測もある程度見通す必要があると思います。

そして、この図書館の「場」をどうデザインしていくか。空間性を生かした知のサロンと見立てると、ここに来れば知性、知識がアップデートできるような新しいわくわく感に出会える、エンタメ性も訴求したい。今回の資料では、デジタルを生かした機能や可愛いロボット活用の事例などもいただきましたけれども、こういうツールを趣旨に合う形でどう適用していくかが重要と思います。さきほどのポジショニングで言うと、リカレント、人生１００年で学び続ける時代の中での図書館の位置づけというのは、本当に重要性を増してくると思います。例えば、生涯学習の拠点として、文科省では社会教育士という制度があり、その方々が活躍し、地域活性にもかかる拠点として、公民館、図書館が見込めます。やはり図書館が大きく期待されますし、都立図書館でそういうモデルができるということは、区立の図書館でもどんどん展開ができますので、そういう仕組みや枠組みを整理して行ってはどうかと考えます。図書館の存在価値、ポジショニングも住民視点で価値あるものとなり、また議論が深められるかと思います。よろしくお願いします。

【吉見座長】

ぜひ今出していただいた話を広げていきたいと思います。田中元子委員お願いします。

【田中元子委員】

前回の会議をまとめていただいてありがとうございます。こうやって簡潔にまとめるとニュアンスを取りこぼした結果、言いたいことと、もはや真逆になってしまう現象が起きやすいなというふうに、資料拝見しながら思いました。誰が悪いとかではなく、そういうものだなと。例えば、建築についても、ここで議論されていることを包括的にできるような、例えばコンペをやるとしたら、そのコンペの条件の内容から持っていかないといけないし、これは「面白い建築作ったら観光客も来るよね」という話ではなかったのに、ニュアンスが違ってきてしまう。いい建築では何を持っていいとするのかというところが取り込まれにくいので、まずそこを気にしているし、共有もしたいなと思います。

それで、今日この資料に出てきませんでしたが、前回の会議の中で一番大事だなと思っ

たのは、吉見先生がおっしゃった「東京が図書館」というお話です。この中央図書館という箱、一箇所に対して今議論をしていますが、ここのあり方によって東京で得られる学び、東京だからこそ、学びに対してどういう視座で住民が生活できるかということを考えるという、私にとってはすごく印象深い一言でした。公民館も同様ですが、こういう建物も昔できて、今は技術も人々のニーズも社会情勢も違いますよね。単なる老朽化への対応だけではなく、昔はお金がなくても学びたいと思う人が多かったかもしれませんが、今はお金があっても「学びって何の役に立つの？」という感じもあるでしょう。学びに対する社会の捉え方とか価値観が大きく変容しているということを、まず意識して行きたいと思います。デジタル技術やインクルーシブに関しても同様ですが、デジタル技術も多分、これから変容、多様化していく。色んなアプリで多言語化に、自分で適合化・最適化させるようなデバイスを持った人がここを訪れるということも考えられるので、ここで何から何まで面倒を見てあげようということではなくて、多様な技術に対して受け入れられる、例えば、東京は他の観光都市に比べて、すごく Wi-Fi 環境が悪いなと思いますが、そういうインフラ、器の部分のことが大事かなと思っています。

インクルーシブに対しても、例えば今日、車椅子の方が手に取りやすい背の低い書棚と言うのを紹介されていて、これはこれで面白いと思いつつ、いつもインクルーシブの話になると、では 2m の背の人のために何をしているの？私のために何をしてくれているの？と思ってしまう。要するに障害のある人に特化するだけでなくて、遍く全ての人間の暮らしがどうあるべきかということを、せっかくリアルな場所ですから、低い書棚だとしたら、背が 2 メートルある人や、逆に、もっと身長の低い人には、この空間がより人懐っこい空間だったら助けてあげられる。要するに、おしゃべりができるかもしれないし、人がコミュニケーションを取りやすく、優しくなれるかもしれない。そうすることでハード面で取りこぼした優しさや、インクルーシブに対する準備をし切れないところを人の力で補うことも、リアルな場でできることではないかと考えています。

もう一つ、前回も話したかもしれませんが、博物館に来る人は自分から来るんですよ。学びに対して前向きになっている方は、どんなことになってもくる。学びに対して「それが何の役に立つんだ」「どうでもいいや」と思っている人にこそ、何かきっかけになれば良いと思います。色んな美術館等に資料貸出をされているというお話が出ましたが、この時にバンバン宣伝して欲しい。中央図書館のおかげでこれができるんですよ、presented by 中央図書館ですよ、そうやってここに知が集積されているということを皆さんに、多くの機会に、明るく楽しい状態で、お知らせできたらいいなと思います。

【吉見座長】

ありがとうございます。最後のポイントはとても大切で、インクルーシブとは一体何なのかというところ、とても大切なことだと思います。それから最初に田中里沙委員からあった「対象者は一体誰なのか、働いている人も含めて」という話と、田中元子委員の、「東京が図書館であって、学ぶ人は一体誰なのか？」という話は合致するのだというふうに思います。田中元子委員が、前回「人間とは何か」という問題提起をされました。僕の個人的意見として、人間とは言うまでもなくホモサピエンスですけれども、ネアンデルタール人など色んな種類の類人猿がいた中で、ホモサピエンスが生き残って我々になっている。ホモサピエンスが他の類人猿と違う最大のポイントは共感力、つまりコミュニケーション力。他の人とお互いに共感し合ってコミュニケーションするっていう能力が秀でていた。もっと優秀な類人猿、色々いたわけです。人間のそのコミュニケーション力、共感力というものがインクルーシブやダイバーシティというものの根底にあるのだと思います。そういうことをどうやってみんなが認識する場を作っていくかということなんだと思います。中島委員お願いいたします。

【中島委員】

図書館で私が一番大きいなと思うのは、やはり無料で開かれていて、非常に日常であるというところです。もし学校に行きたくなくても、図書館に来るとできるということは本当に多くて、知にアクセスすることができる。場合によってはあまりお金がなかったり、あるいは親や学校と上手くいかなかったりしても、ここに来て知の喜びに触れることができるというのが、図書館が担ってきたすごく大きな意味合いだと改めて思います。

その上で、素敵な考え方で、”Makerspaces are part of libraries’ expanded mission to be places where people can not only consume knowledge, but create new knowledge”(メーカースペースは、人々が知識を消費するだけでなく、新しい知識を創造できる場所であるという、図書館の拡大された使命の一部である)という米国の図書館協会の方の言葉があります。図書館が、知を消費する、正しいものが得られる場であるだけではなく、自分がクリエイトする場に変わりつつある。知るだけではなくて、創る場に変わりつつあると世界では言われていて、面白い拡張定義だなと思っています。世界の場合は、そこでちょうどメーカームーブメント、作るのが楽しいという流れがあって、これだけ聞くと誤解を与えそうですが、３Ｄプリンターやロボット、センサーといったものが世界中の図書館にあって、面白いのはすごく日常化されている。「プログラミング教室に行きます」という感じと全く違って、本当に遊び場で、本と同じような感じで、段ボールの

ような遊べるものが置いてあったり、お絵かきができたりする。

あと、私は「作る」と「繋がる」がポイントだと思っています。まず「作る」、それから「繋がる」が意識されたスペースが作られていている。世界的にはメーカースペースがすごく出てきて、面白い流れだなと思います。急に日本がそのまま入ろうとすると、これもよく言われていることとして、ツールの問題ではない、それで何をみんなが生み出したくなるかというところが大事なんだという話になる。ただ受け取れて、正しいものに出会うだけではなくて、自分が何かクリエイトするという気持ちにさせてくれる遊び場があると、必ずしも機会に恵まれないとか、親と上手くいかない、経済的に難しいとか、不登校の子も含めて、そういう子たちが図書館に来ると、読むことで知に出会うだけではなくて、作りたくなったり自分の表現をしたくなったりできるのではないか。インクルーシブについても、どうしても配慮してあげる、やってあげる、といった感じも出てしまいがちですが、車椅子の人や、目が見えない人に出会えていろいろ話せたり、みんなが体験できたりする場があると良いのではないか。

ロボットも、事例では助けてくれるものが紹介されていますが、そうではなくて、自分が何か作りたくなった時に、これを使っていいよという感じで置いてある、お金のある家や、そういう学校に行っている人たちだけのものではなく、もっと当たり前のものとして出会える、無料でそういうものに出会えると面白いなと思います。日本なりのアダプターの仕方、例えば色んな日本の文化、遊びに出会える中に混じって、ちょっとだけロボットがあってもいいのかもしれない。与えてくれるのではなくて、むしろ自分が作り出したくなるという感覚にみんながなれるような場づくりを、東京の中央図書館がトライしてみてもらえるとすごく面白いのではないかと思います。

私たちも二か所、千葉と香川県の善通寺で、メーカースペースの実証をさせてもらいました。すごく面白くて、来た子たちはすごく遊ぶ。日本では子供たちが多くなりますが、海外で面白いのは、大人の方や、おばあちゃん、おじいちゃんも普通にそこで遊んでいる。日本でも「この時間は大人の時間」という形でやったら、大人の方がすごく遊んでくれて、盛り上がりました。日本人は気を使うので、子供がいると大人は入らないという傾向がありますが、子供だけではなくて、大人も遊んでもいいよというような場を、ある種、公的にパブリックな場として作れると面白いなと思います。だから、図書館のあり方として、誰でもアクセスできる、広く開かれた場として、機会の創出という意味で、イベントだけではなくて、恒常的な場としても何か考えられることがあるのではないかと思います。それに際して人づくりというか、そういう意味で言ったのが資料に書かれているのですが、多分、これだけ見ると３Ｄプリンターだとか、文系の司書さんが多いとか、そう

いう書かれ方になっているから、これ聴くと違う印象だろうなと思いますが、本当に司書さんはすごく面白くて、みんな知が大好き、本が大好きで来られている。ただどうしても確かに日本では文系理系が別れているので、私たちが実証をやった時の司書さん、みんな遊びに来る時はぜひやりたいって来てくれますが、やはりそこを面倒みるのは怖いというところがあって、最初は、もしかしたら新しい存在を地域の大学生等を巻き込みながら一緒になってやっていくと、だんだんみんなお互いに自信がつくということがあるのかなと思っています。こういう人づくりが、空間づくりとともに大事だと思います。メーカースペースだけを用意するわけではなく、そういう新しい機能やあり方で「作る・繋がる」というのを考えて、挑戦していただけるといいなと思った次第です。

【吉見座長】

まさに今日議論したいキーポイントを言っていただいたと思います。私も本当にそう思います。つまり consuming knowledge ではなく、creating knowledge の場だということ。で、その creating の中に「作る・繋がる」が入ってくる。後で僕が言いたいなと思たキーワード、この「作る・繋がる」をつなげるのは本だと思います。Book beyond book と言うか、本を核に考えることによって「作る」と「繋がる」がつながる。それが図書館かなという気がして、これは後で補足をしますが、今の議論も全部つながってくると思います。あとで少しつなげて議論を進めますが、木村先生お願いします。

【木村委員】

有難うございます。結構似たことを考えている気がします。まず、誰のためのという話で、もともと中央図書館は、割と専門家のための図書館で、ここにしかない資料を見に来る人達の為の場所なのかなと思っていたので、それが維持されるのか、もう少し都民に開かれた図書館にするかで、だいぶ方向性が変わるなと思っていました。この間の議論や、今回の資料からは、割と開かれた図書館にしていくという印象なので、そちらの方向で色々お話したいと思います。

図書館が建て替わった場合に、恐らく 50 年とか、場合によってはもう少し長くそのまま存在する図書館になるだろうということで、そうするとここから 50 年は、どんどん書籍の電子化が進んで、物理的な本である必然性のようなものが薄れていく。本屋さんにとっても、この数十年が厳しかったように、図書館としてもますます厳しくなっていくのかなというふうに思います。その中で、今後 50 年という期間で、この中央図書館がリアルに存在する意義を考えていくと、そこに図書館があって、やはり人が来ないと意義がな

い。しかも本や知識を求めて来る。先ほどおっしゃっていた「本を介して」というところが重要になってくると思います。例えば夏休みの宿題で子供たちが江戸のことを調べに来る、中高生が課題研究の題材を探しに来る、そして東京都が、デジタルの地図や江戸城の再現等のデジタルの取組みをしているので、そういうものとの連携や、地域の方からすると、例えばフランス大使館と連携して、フランスの文化講座があれば、遊びに行きたいと思われるかもしれません。そこで色んな書籍が連携して提示されたら、それを借りてみよう、もっと調べてみよう、と思えるかもしれない。アマゾンで本を買えばいいではないかという現状がある一方で、本屋さんが、単に本がたくさん置いてある場所ではなくて、本の見せ方、本をどういうテーマで置くのか、または色んなイベントとの連携というところで、実在することの特徴をどんどんとんがって出している。図書館もそういうふうにして行かないと、おそらく電子図書館に対して存在意義がなくなっていく。

その意味では、色んな図書館の蔵書をどう使ってもらえるのかというアイデアも含めて提示しいく必要がある。そして、「日頃から訪れたい」「居心地がいい」「そこでこんなイベントがあるから参加してみよう」「こういうものがあるのなら、子供を行かせてみよう」等、繋がることでより来場者が増えたり、そこが居心地のいい場所になっていく気がします。本を媒介にして、都民の色んな層の人たちに対して、その実際の課題と本とを繋ぐような立ち位置になれるかどうかは大事だと思います。

【吉見座長】

ありがとうございました。委員のみなさんのおっしゃっていること、すごく共通性が高いと思います。木村先生のお話を聞きながら、つくづく思いましたが、恐らくこの会議の開催はこのタイミングで良かった。20 年前に開かれていたら、それほどエキサイティングではなかったのではないかという気がします。つまり今、私たちはデジタルメディア変容と言うか、デジタルメディアによって社会のインフラが圧倒的、劇的に変化する真っ只中にいて、その中で public space of human knowledge、人間の知的空間の、ある種の公共的な場が、一体いかに在り得るかということを、本屋さんや読書の現状を見ながら議論しているわけで、そうすると、自然とこの話は、単に一図書館の未来というより、人類の知の未来を考えるという話になってきております。浅川委員からもお願いいたします。

【浅川委員】

浅川です。事務局の方にいろいろまとめて頂き、ありがとうございます。アクセシビリティとインクルージョンに関して、たくさん網羅されており、ぜひ資料として残していた

だきたいと思います。ただ、一つ、いろいろ調査して行く中で、気をつけなければいけないことがあります。ここで示されたアクセシビリティの事例には、自閉症対話ロボットやスマートグラス、視覚障害者のナビゲーションアプリがあります。こういった技術はすでに製品化されているものもありますし、研究中のものもあります。これからはAIを使った新しい支援技術も出てくると思います。常に最新の技術動向にキャッチアップしておいたほうがいいと思います。

また、すでに導入されているからという理由だけでなく、今後の最先端の技術動向も踏まえて新しい図書館で何を採用するか決めていくことが大切と思います。図書がデジタル化されると、物理的な図書館の役割が変わります。デジタル化されて来館する必要がなくなる方もいれば、デジタル図書にアクセスできなくて取り残される人もいます。図書館が、そういった方々を対象に、デジタル図書にアクセスできるようにするためのサービスを展開されてはどうでしょうか。

誰にとっても使いやすい環境を作るのは大切ですが、そのためには社会の仕組みを変える必要があると思います。例えば今は、点字ブロックの設置場所や車いすを考慮した高さなどが決められていますが、これらは、テクノロジーで解決できる可能性があります。図書館が現在の環境と未来の環境を体験できる場になることを考えてはいかがでしょうか。この両方を体験することは、現在の規制を考え直すきっかけになるかもしれません。

新しいアクセシビリティの仕組みを取り入れるには人々の理解が必要であり、そのような議論をする市民会議のようなものを設けることも一案です。図書館が、新しい時代におけるダイバーシティとか、インクルージョンというものを考えられるような場になっていければいいな、と思いながら聞いておりました。以上です。

【吉見座長】

ありがとうございました。最後の点は重要だと思います。つまり、勿論ダイバーシティ、インクルージョンが当面の重要なテーマでありますが、それを超えて、その図書館を一体誰が運営するのかとか、つまり市民会議や来館者会、もちろん職員の方々のお仕事、それから来る人々が図書館の主体になるということは、一体どういうことなのか。色んな会議体がそこから生まれてくると、では誰がこの図書館、東京都のこのライブラリーの仕組みを運営して行くのかという話につながってくるお話を頂いたように思います。

少し議論を進めていきたいのですが、私も委員の一人として自分の意見を言わせていただくと、未来の東京都立中央図書館を考えた時に、先程から皆さんのお話に出ているように、これはデジタル社会の公共図書館はどうあるかというテーマです。その時に３つ、ま

ずは当然の前提として踏まえることがあると思います。一つは、アクセシビリティの問題。二番目は図書館がある種、その本が置いてあるだけではなく、コモンズの機能を持たなければいけない問題、つまり図書館がカフェでもあるべきという点。それから三番目は完全にデジタルデータとして、いろいろな人たちにデジタルデータを提供する機関になっていかなければいけないということ。これはもう当然で、当たり前のことだと思います。

それに加えてどういう未来の図書館を構想するのかというのがここのメインテーマで、私は中核にあるべきものは本だと思っています。つまり、デジタル社会の中でやはり図書館の中心にあるのは本。でも、その本の形が変わっていくということだと思います。今までの本ではないということですね。ある種、Book beyond book、本を超えた本と言うものになっていくわけです。その本はどういう本であるかということも、かなりはっきり分かってきていて、少なくとも三つ特徴があると思います。一つ目は、その未来の本の中には、明らかに映像と音響、オーディオビジュアルというか、さまざまな動画や声、音やそういうものが本の中に全部埋め込まれている。活字だけでは絶対にないということですね。そうするとそういう本がいっぱい当たり前になっていって、デジタル本として当たり前になった先にどういう読書があるのか。その読書本がいっぱい置かれている場所はむしろ限りなく映画館に近くなるというか、むしろ図書館イコール映画館、シアターみたいなものに当然なってくるわけですよね。だから、そうすると図書館とムービーシアターの融合の先にある公共空間はどういうものであるか、これ第一だと思います。二番目に未来の本を考えたときには、本は間違いなくインタラクティブな、つまり読者が実際に本に書き込んだり、新しい本をそこから作ったりということが無限に可能な本に必ずなるんだと思うんですね。そうすると、そのインタラクティブな本がたくさん集まっている図書館というのはどういうものになるかと言ったら、当然ながらインタラクティブな図書館になってくるわけです。それはどういうことかというと、中島委員が言われたことに近いイメージですが、図書館が出版社、パブリッシャーになるんだと思います。つまり、図書館に来た人々が自分たちの本をそこで出版して行く、作っていく。図書館に来た人々が、自分で出版した本がそのまま図書館にどんどん収蔵されるから、あっという間に数億冊になるんですけれども、そういうものになっていくということですね。そして三番目にこれも未来の本というのは当然デジタルですから、ユビキタスというか、場所に拘束されない本にもなる。場所性を持った本になると同時に、その場所を超えていくわけです。そうするとユビキタスな存在としてのその図書館は、田中元子委員が言ってくださった話に重なるけれども、東京の至る所にある。一番図書館になり得る場所は、駅だと思います。あらゆる駅ナカ空間に図書館は作れるはずで、そうすると、東京の交通網とこのライブラリーのネット

ワークが一体化するという形で、スマホで自分が好きな映像しか見てない乗客が、図書館に関わってくるというような未来があるといいなって思います。

それができると、世界で IFLA、International federation of library association というのがあるらしくて、ここが毎年 public library of the year award を出している。で、これを取ると。日本で今これを取った図書館は一つも公共図書館は一つもないらしいんですね。この間、ヘルシンキの市立図書館がそれを取って、確かに見ると素晴らしい。我々が目標にしなければいけない要素が全部入っている感じがするんです。なので、このヘルシンキ中央図書館を超える図書館を構想して、このアワードを取りに行くだけのものをここで提案して作っていこうというのが私の意見です。

以上、全員からご意見を頂きましたが、二つもう少し詰めておいた方がいい論点がございます。全員が言ってくださったことですが、一つは「誰」、人の問題です。最初の田中里沙委員の言葉で言えば、対象者は誰なのか、ステークホルダーは誰なのか。田中元子委員の言葉で言えば、学ぶ人は誰なのかということ。誰がどう学ぶのか？そして、ドンピシャで中島委員が言ってくださったことですが、クリエイトする主体につながる主体、この人たちは誰なのかということですね。木村委員が言ってくれたことで、人が来るというところにポイントがあり、誰がどうここに来るのか、誰が集まってくるのかということ、浅川委員の言ってくださった障害のある方たちの持つ可能性ということになります。人の問題についてもう少し像をはっきりさせていくという議論を、まず第一点としてできればと思っています。第二点として、空間の問題です。建築やテクノロジーの話ということになるかもしれませんが、作る場所や繋がる場所として、一体どういう場所をここに作ったらいいのかという場所の問題、空間の問題、これがもう一つだと思います。

【田中元子】

やはり東京の、ひいては日本の知性をボトムアップすることはすごく大事な目標に掲げるべきだと思います。それは、インクルーシブとは違うかもしれない。要するに、何らか障害のある方でも、本が好きな人は来る。そういう建物になっていたら自分で使いこなしてくれる。私はそういう人は大丈夫と思っています。本当に私が危惧しているのは、知性とか学びそのものに対する偏見じゃないですけど、あまりに離れてしまっていること。これが東京、日本の課題だと思っています。

今回、こうリアルに本があって、しかも中央図書館は本が借りられないというのもすごく面白いですよね。ここでしか触れない。私は実体があることそのものが、セレンディピティの原則というか大事なことだと思っています。調べものは分かっているものをより深

く調べるんですよ、それはアナログの本であろうとデジタルデータだろうと。でも、たまたまそこにあったということを、先程の駅の話でもそうですし、起こしていけるということ、それが自身の体験も含めてですが、インテリではなくて、何を調べていいかも分からない人、調べ方を知らないような人も、別の興味を持つきっかけになる。そういう人は、空っぽじゃないの。ちゃんと日本語も読めるの。でも情報をポテトチップみたいにしないと、その人のそばにはいかないんです。インテリの人はそれがわからない。会席料理を食べ慣れている人は、ポテトチップにすることをわからない。

何でもポップカルチャーにしろと言うのではないです。ヘルシンキの図書館、こんな興奮する第一印象ありますか？インテリだって、そうじゃなくたって入りたいですよ。私がくどく言っているのは、人間ってそういうものなんですよ。恐ろしいのも人間、面白いのも人間です。目の前にこんなものが現れれば、それに誘発される。本があれば、うっかり手に取ってみようとする。そういう限界、そういう性質がある動物だということに対しては、それに沿ったことをやった方がいいのではないかというふうに思っています。

中島委員から「作る」と言うお話がありましたが、私は中央図書館でもしやれることがあったら「シンポジオン」がしたいです。シンポジウムの起源があって、みんなでお酒飲んで駄弁ることです。今ギリシャに行っても、それを体験するようなことが行われているそうです。葉っぱの冠をつけて、当時の衣装を着て、だらしなく寝そべって、たまに飽きるから女の人が踊ったり、ということをしながら三日三晩、人間ってなんだろう？生きるってなんだろう？って、結論もなく、グダグダ喋る。

何かを作る以前に、多分この情報という言語なり映像なりを自分の言葉に咀嚼して、そこで見たものと書かれているもの以外のものが誤解であっても、自分で咀嚼して自分の言葉とか表現とか発言になるということが初源的な、知識を使うという段階だと思います。私はここでぜひ目的を持って学ぶということ以外に、ダラダラ知性に触れられるということもあったら素敵だなって、想像しながら聞いていました。

【吉見座長】

ありがとうございます。キーとなることを言ってくださったと思います。本当にヘルシンキの中央図書館素晴らしいよね。東京の都心に突然現れたら、とりあえず難しい本は読めなくたって、あれ何だ？ってすごく話題にもなるし、素晴らしいよね。

このアワードを取りに行こうよ。これが目標、これ取るぐらいのものが日本でもできたらすごいと思いますよ。ヘルシンキはもうできているわけですよ。もっと小さな都市もいっぱい取っていますよね。東京でとれなくてどうする？みたいな。

【田中元子委員】

この喜びのある器でもって、今議論されているようなこと、要するに様々な方が様々なアクセスができるということをちゃんと形にできるような、コンペの条件を練って行くとか、コンペにするかわかりませんが、そういうことも大事かなと思います。

【吉見座長】

ヘルシンキや世界の最先端の図書館ってすごく面白くなっていますよね。だから、そのレベルの図書館を作っていくべきだということですね。ハードル高いです。

【田中元子委員】

私は、テクノロジーが全部解決してくれると思っていません。自立するということは、何でも一人でできることを指すものではないと思います。色んな自分の限界や、うまくいかないことに対してユニークに受け止められたり、人に甘えたり助けてもらったり、そういう、色んな切り札というか、受け止め方の切り札が多いことが自立だと思います。

なので、この建築や物理的環境に、喜びや本能的な前向きな感覚を与えられるということはすごく大きなことだし、インクルーシブの意味も含めて、全ての方の自立につながるものでもあると思っています。

【中島委員】

今の流れで「繋がる」で言うと、お祭りみたいなというか、ヘルシンキの図書館では、楽器があったり、多分フロアによって場所を分けてるんだと思いますが、静かに見る場所もあるけど、ワイワイできる場所もあって。真面目に本を読みたいという子だけではなく、もしかしたら面白いアニメや漫画があるかもしれない、音楽があるかもしれない、自分が何か作れるかも知れないというワクワクみたいなところで、多様なきっかけがあるといいなと思います。さっきのシンポジオンもそうなのかな。カフェも近いような。

【田中元子委員】

例えばシェアキッチンみたいなものがあったら、すぐ料理する、みんなで一緒に食べよう、とかってね。

【中島委員】

イベント的な非日常のものもあれば、常設的にがやがやしてもいい場所がうまいことあって、いろんな人が繋がる場ができたら面白いと思います。例えば、視覚や聴覚障害のある方、車いすの方やお年寄りなど、違う方と会えば会うほど、感覚や見ている景色が違って、そういうことを聞けば聞くほど、自分が開いていくような感覚が得られる。田中委員もおっしゃったように、自立も大事ですが、みんなが一人で生きていけるだけじゃなくて、知り合うことによって助ける、関わり合う面白さがある。

先程の Book Beyond Book というお話がすごく面白いと思います。新しい意味での拡張された本のようなものがあると、例えば人そのものもそういう意味では知の集積なので、おじいちゃん、おばあちゃんの方がいろいろ知っているし、普段の自分の感覚とは違う感覚を持って、色んな人に出会える。自分自身にもたぶん色々あるので、結局最終的には全員ダイバーシティだということで、自分の個性も発揮してもらう。車いすの方や見えない方も積極的に来てもらう日を作って、そこにはおいしいものがあり、カフェがあったら本当にいいですよね。

【田中元子委員】

対象は限定されずに様々な方が普通にいたらいいなと思います。喫茶店をやっていると、寝たきりの設備をつけた子供をお母さんが連れて来たり、デート中の子がいたり、年寄りや動物がいたり、様々な人に出会えます。私はそういう人たちが何に困っているとかどうとか知る以前に、「ああ、こういう人もいるんだ」ということが日常見てわかることがすごく大事だと思います。そういう人たちについて学ぶというふうに構えると、また意識の高い人しか来なくなってしまう。普段から一緒に遊べたらいいなと思いますね。

【吉見座長】

浅川委員、関わってくる議論かと思うので、一言ご発言いただければ幸いです。

【浅川委員】

浅川です。一つだけですね。テクニカルな分野の話であり、技術者としてまた視覚障害者の立場として私がお伝えしたいのは、テクノロジーは完璧ではないということです。しかしながら、テクノロジーによってできないことが可能になることは事実であり、テクノロジーを最大限に活用して自立できることは重要だということです。ここは今の議論で私がぜひコメントをしたいところです。

【吉見座長】

ありがとうございました。田中里沙委員。

【田中里沙委員】

皆さん刺激的なお話をしてくださっていて、イマジネーションが膨らみますが、図書館に来るときって、通常は目的があるかなと思うんです。探し物をしたい、読みたい本に出会いたい、図書館の空間で宿題をしなきゃなど。でも今お話を聞いていて、「知性」ということにフォーカスすると、世の中には多様な考えがあるということを知ることなので、自分からアクセスしなくても、体感して取り込むことができるとか、触れることができるということが、ユニバーサルの視点からはポイントになってきます。目的を持って図書館に来ていた時代から、目的がなくても、とりあえず図書館に行ってみたら何かが起きるかもしれない、創発の装置になるかもしれないというふうな、発想の転換、役割、存在意義の発見、価値の提案があっても良いと思いました。同時に、今の世の中で顕在化している問題は、自分の意識の範囲や自分の専門分野が小さくまとまっていて、他のことに関心を持たない、スマホの中でも関心のことしか探さないことです。これまで全然興味関心なかったことに目を向けるとか、さきほど田中元子委員が話された、こういう人もいるんだと気づくこと自体が貴重な体験だと思うんです。その人に何かをして差し上げなきゃというような、おこがましいことではなくて、世の中は広い、「ああ、そうなんだ」と思う感覚が、気持ちを広げてくれます。その一歩が吉見先生の言うデジタル社会の人間のあり方を大きく変える機会になるのかと感じました。

よって、誰と、誰が何のためにという議論で行くと、対象者はスペックで見るのではなくて、こんな風な本来持っている人間の感覚を呼び覚ます為とか、意識を変えるような人が対象とか、そういう風なデモグラフィック（属性）以外の切り口や定義でまとめたりすることも必要ではないか。また、空間に関して、「感じる空間」と言いましょうか、こういうスペースがあると何らか自分からアクションしたいと思うし、図書館が存在する町の中との連続性も考慮して、今後は、地域性や街づくりの中における連関性も定義として入れて検討もできると思います。

【田中元子委員】

ざわめきがある、音を出してもいい図書館として、武蔵野プレイスは近いかと思います。ダンスや音楽をしたり、カフェがあったり、子供たちが騒いだり。でも静かな自習室もある。公民館と図書館の中間のような感じを強く受けます。太田市立美術館・図書館の

ような複合施設も、アートを見に来たつもりで気になる本を見つけたり、その逆も然り。
　あと、誰が運営するかという点でも、沖縄の公民館等で、停学、退学になりそうな高校生を引き受けて、公民館の仕事をやることで免除されるということもしています。要するに機会のなかった彼等に、だから悪いことをしてしまったりする彼等に前向きなチャンス、体験を提供している事例もあります。

【吉見座長】
　今の最後の話で言えば、街中に、この新しい中央図書館がどこかの場所に建物であると同時に、エキナカとか街角とか、色んなところに同時に中央図書館が存在するなら、そこの運営は別にその職員がやる必要はなくて、例えば街にいるお兄さんが、自分のやりたいようにやって、図書館と一緒に運営をして、時々ここに集まって、それで全体どうするっていう会議を開いています、という完全に新しい形が取れる。

【田中元子委員】
　この賞を取れるとしたら、中央図書館でありつつ、東京都として取って欲しいと思うぐらい、「東京が図書館」ってなったらいいなと思います。

【吉見座長】
　東京ライブラリー、東京シティ イコール ライブラリー。

【田中元子委員】
　今知をめぐるアクセスが多様化していますよね。色んなものをいくらでもデジタルで調べられて、大方すぐ出てくるものは刺激的なサムネイル、アイコンだったり、誰か素人が裏付もなく作っていたり、偏見が混ざっていたり。要するに手作りメディアの悪いところもすごくあると思うんです。私はこの中央図書館があるということは、公正で地に足のついた、どんな時代であっても、そういうガチャガチャ、振り回されないポテトチップス化されていない情報がちゃんとありながらも、ある種の手に取りやすさや居心地の良さ、ヘルシンキの建物のような本能的な喜びを担うという両輪があると素敵だなと思います。

【吉見座長】
　この新しい中央図書館が「つくる」あるいは「出版する」という機能を図書館自体の中に持つ形になれば、その時には、市民一人ひとりが作り、パブリッシュされた本は、フェ

イクニュースではいけない。図書館に収蔵されるべき本というのは映像からなっている本でも声だけからなっている本でもいい、動き出すような三次元の本でもいいわけですが、本である以上は、そこにひどい偏見、フェイク、無断引用や剽窃があってはいけないんです。そういうことは、みんなが作っていくプロセスで学んでいく仕組みがないと、勝手に作ればいいというものではないと思います。

【田中元子委員】

インテリの人や中立的な情報に比べて、フェイクニュースや洗脳、煽動するようなものというのは人間をよく分っています。情報を手に取らせ、多くの人に共感させたり、夢中にさせたりする力を上手に使っているので、それに負けない力は欲しいなと思います。

【中島委員】

ヘルシンキの図書館では、市民に聞き取りして、一つは静かにリラックスできる学べる場所、もう一つは物作りを学べて創造性に触れる場所という形で、図書館の従来の機能は持ちながらアクティブ性も求めて、フロアごとに分けるということをしたみたいです。柱を使わない、境界が無い等、空間的な美しさも含めて考えられているようです。

あとはミュージアムも今変わってきています。ティンカリングという言葉があり、いじくり回す、作るということがミュージアムにも求められつつあって、一例として、AkeruE パナソニックセンターがあります。今週のテーマという形でコンセプトがあって、それに合わせていろいろ作れる場がある。道具もあって、作ったものを置いて帰ると１ヶ月間、それが展示される。子供たちは本当に自由に作っている感じです。

何が言いたいかというと、先程の publishing は面白いなと思っていて、それなら常設ができると思うんです。環境を作って、ある程度、作るときに気をつけなければならないルールが置いてあったら、絵本を作ってここに置いて行ける。

作るための場は、比較的常設にしやすいのではないかと思います。私たちも常設展や、メイカースペースのようなものをやりましたが、例えば仮面を作ろうとなったときに、図書館にはたくさん仮面の本があって、世界中にあるいろいろな仮面を本で見た後に、自分なりの仮面をダンボールで作って、テクノロジーも使っていろいろ入れ込んでいく。仮面を調べたいと思った時、図書館だと色んな知が得られて、すごく面白かったです。

あと、空間を作る側に市民や子供が入れる。また、司書さん的な役割をしたいと思う子もいっぱい居ると思うので、臨時の司書だったり、ここだけだったら見られるとか、そっち側の役割にバイトとして大学生とかも入れるとなったらすごく喜ぶんじゃないかと思い

ます。シニアの方も含め、具体的にできることはいろいろありそうだなと思います。

【吉見座長】

ありがとうございます。口を差し挟むと、小さい子と本で調べて仮面を作って、多分そこから先が本当はあるんですね。作った仮面を今度かぶると、人は踊り始める。踊り始めることで別の人になる。仮面をかけると、非常に面白い事に変身できるんです。変身できてしまうことによって、別のその存在にそれぞれの人がなっていく経験を、今度は思い出すっていうか忘れないっていう、そういうシアターですけども、それがそういう風なライブラリーがどうシアターになっているかというプロセスでもあり、重要なのは作っていったものが、図書館の中で本として収蔵されていくこと。もちろんそこで収蔵基準をどうするのか、差別的な言葉や剽窃等、いくつかのクライテリア（※指標、尺度）はあると思います。だけど市民が作ったものが、図書館の市民コレクションみたいな形で収蔵されて、検索もできるようになっていくとすると、どんどんどんどん本は増えていくんだけども、デジタルだったらそれは可能。そうすると、みんなが作家になり著者になり、読者にもなる。みんなが著者にもなっていく図書館というふうになると、あるいは田中元子委員の言われた、少しずつでも知性を底上げする機能を、担い得るんだと思うんですね。

もうプロフェッサーの時代、教師の時代は終わっていますから、我々が教壇から何を教えても成立しない。どんどんインタラクティブにしておかないと、大学でも成立しないし、そうなってくると、教授よりも必要なのはコーチだから、コーチングというか、ちゃんと脇でインスタンスをしながらインストラクトしてあげる人は常に必要なんですよ、教育や学びにおいては。それがいないと学びにならないので、そういう人の需要を増やしてくるということは、司書の未来とか、キュレーターの未来っていうところは、やっぱりそういうコーチング的な部分がますます普通の人がなれるというふうな。だから、図書館の未来を考えることが、単に建物の形を考えるということではなくて、やっぱり司書というものが未来の図書館の中でどうあるべきで、来館者はクリエイターとしてどういう役割を演じるのかという、そういう問いなんだと思います。

【田中元子委員】

以前、調剤薬局をつくる仕事をしたんですが、今医療の世界でも何でもかんでも大学病院に来られると困るから、地域のかかりつけ医、地域のかかりつけ調剤になっていくということに対して、栄養士さん、薬剤師さんがどう活動できるのか、どう関われるのかって働き方を拡張して行くようなこと、他の分野でも起きていますよね。本当に教育が必要な

このコーチング的なこと、要するにただ一方的に提供する、誰が相手でも同じものを提供する、「これが完璧ですよ」と押し付けるんじゃなくて、一人ひとりに対してどう手を引けばいいのか、どうアシストすればいいのかということについて、たくさん経験値を持っている方の方がたくさんモノを知ってる人よりも大事じゃないかなって思うんですよ。

武蔵野プレイスでは、司書体験とか色んなプログラムがあって、いいクオリティを保ちながら指揮される。チューニングがうまいなと思いながら見ています。本当にこれチューニングの問題だと思っています。どっちかに触れるとかではなくて。

【吉見座長】

少し理屈っぽいことを言うと、多分、図書館という存在の役割が変わっていく。つまり、今までのマスメディア時代、近代社会の図書館は、グーテンベルク以来、本は活版印刷で大量に生産されて出版社が発刊し、書店を通じて流通していく。図書館は、その流通して行く本のかなりの部分をストックし、色々な人に提供するという役割を担ってきた。ところが、今のデジタル社会の知の仕組みはそうではなくなっていて、もうどんどん循環するというか、あらゆる人が書き手になり、そして知の作り手になりながら、その知が、フェイクも含めて、色んなものが玉石混淆ですけれども、循環して行く、循環して行きながら書き換えられていく社会に変わっている。そうすると、そういう知の循環型、デジタル循環型の社会において、図書館は今までのような大量生産、大量流通、大量消費という中で、そのストック部分を受け持ってきたのとは違う役割になるんですね。図書館の存在そのもので、今ヘルシンキであれ、色んなところであれ、ではその違う役割は何かということの実験段階に入っているから、新しい試みが世界中から出てきているので、この実験に対する明確な東京からの答えを出すことができれば、これは世界中の人が理解するんですね。今何かを実験しているということを皆考えながら、図書館という場を使って、フィンランドはフィンランドの答えを出している。アジアからの発信がまだ殆どないというのは、キャッチアップ型の社会ですからヨーロッパに全然かなわない。でも、東京からそういう意味で違う答えを出すことができれば物凄くイノベーティブだと思います。

【田中里沙】

イノベーティブというコンセプトが出ましたけれど、そうすると司書さんの役割というのも、実は館内にいる方だけではなくて、町の人も、繋がりが建物を超えるというのが理想ですし、東京都全体がライブラリーといった構想も見えます。

【吉見座長】

地下鉄で乗り換えるときに、無駄な空間、殺伐としてスペースだけあって、誰も座らないようなベンチが置いてある、全く魅力のない空間がいっぱいありますよね。

【田中元子委員】

このヘルシンキのような図書館がある町とそうでない町では、一般の人々の知や学びに対する感覚が全然違うのではないかなと思います。このような図書館があれば、すぐに「行こうよ」となって、知に触れるということが、全く構えずに、身近にある。感覚的に知性に対する距離感を埋めていくということは、大きな課題ではないかと思います。

【吉見座長】

都立中央図書館の強みはやはり都心の一等地にあること。地方の都市でしかできない良さもいっぱいありますが、この図書館はそうではなく、東京という巨大都市圏の中心中の中心に在る。そこでやれること、そこでしかやれないことは沢山あると思います。

かなり議論をして来ましたが、今日具体案を出して、次回以降はまとめに入らないといけません。色んな具体案や発想など、ラディカルな発想がいっぱい出てきているので、消化するのは大変かもしれないですが、事務局の方から委員の先生方にもう少し突っ込んでみたいことをお聞きいただけないでしょうか？せっかくですので。

【事務局】

対象の話で、田中里沙委員から、例えば子供とかそういうものではないというようなご意見があったかと思います。その辺りのイメージ等、お聞かせいただけると助かります。

【田中里沙委員】

それはやはり定義していくことになりますよね。あらゆる人を包括的に受け入れる場、空間ではありますけれども、特にこういう考えを持った人とか、こういう関心を持った人とか、そういうことをいくつか、楽しくワクワクするような形で明文化できるといいなと思います。テクニカルな、マーケティング的な話になると、アーリーアダプターからレイトマジョリティ、フォロワーまで、その対象層を最初新たに設定する時も、認知してもらわないと広がりませんので、そこは情報発信の手順を設計しないと難しいと思います。実際に新しい図書館が立ち上がるタイミングでは、どのぐらいの方々に支持され、活用されるかという説明責任も出てきますでしょうか。今日いくつか出した方が良いですか。

【田中元子委員】

今東京都でスタートアップ支援をしようという動きがあるじゃないですか。でも一方で、例えばこの図書館ができて、スタートアップ支援のための施策というか、アプローチをたくさんして、アーリーアダプターをそこに絞っていこうとしたら、そういう人たちが本来しているかなと。私は最初の踊り子が、次一緒に踊る人の手を上手にどう引くかというところにかかっていると思っています。ディスコで最初に踊る人がマイケルジャクソンなら、みんな観客になってしまって誰も踊らない。でも恰好悪い踊りの人が踊っていたら、こんなところにいたくないって帰る。ちょうどいい踊り方をして、あなたも一緒に踊ろうって手を引く人が大事なんです。なので、最初のターゲットを考えるのであれば、知性をもっと底上げしたいとか、可能性を追求していらっしゃる方々、かつ、それが蛸壺化することよりも広げていくということに対して、知見なり経験なりがある方がチームになったり、そういう方々による最初の取組みがあって、それが手が離されて、色んな形で自走するという方向が、最初から設定されるというのは大事かなと思いました。

【吉見座長】

提供する側とそれを享受する側という二項対立は崩れるべきなんですね。そうではなくて、今までの来館者はどこかで運営者にならないといけない。そのときにハードルを一つ一つ取っていく。例えば、地下鉄の駅ナカ空間に図書館があって、そこを運営しているのが近所の若者や、あるいは定年退職後の誰かで、でもそれはこの中央図書館のコミュニティの一人でもあるとていうような役割を与えるわけですよね。

そうなっていけば、その人を見てまた人が育ってくると思うんです。それは単なる一来館者というよりも作り手であり、運営者が育ってくると言うことが、東京をつくる存在、主体が図書館を媒介に育ってくるということなので、たぶん、このメディア変容の中で起こっていることですけれども、その送り手・受け手の構造が完全に崩れたと、それで全員が送り手になっていくってこと。でも送り手の中には質の良い送り手もいれば、悲しくなってしまうような送り手もいるわけじゃないですか、世界を見れば。そうするとやはり嬉しくなるような送り手が増えた社会の方がいいと思うんですよね。

【中島委員】

都内でも格差が広がる中で、一等地だけど来ようと思えば来られる場所なので、意識の高い人だけではなく、今まであまり図書館に来なかった人が来られると良いなと思いま

す。その上で、対象者は最終的には広くしていくんだと思いまうすが、最初は素敵な作り手から考えてみるのも良いかと思います。

例えば、小学生たちにこの場を 1 週間明け渡すから、自分たちが司書さんだったらどういうふうに空間設計するか考えてもらうとか、あるいは今度はそこで、おばあちゃんおじいちゃんに遊びを教えてもらう 1 週間を考えてもらうとか、最初は割とニッチな感じで入ってもらって、そういう子供やお年寄り、海外の人とか、色んな人たちが作り手に回って、一般の普通の人たちが関われるという感覚が醸成される感じを仕掛けていくことができないかなと。最初からここは広く子供達の為などと決めてしまうよりは、そういう色んな仕掛けで最終的には広げていくという感じが何かできないかな。そこで与える、与えられるというのをいかにかき混ぜていけるが大事なんだろうなと思います。

【吉見座長】

一言付け加えると、今のお話は、例えば、図書館の中でさっき田中元子委員が言われたことで言えば、シンポジオン、夜まで開けるかどうかわからないけれども、ずっと駄弁るような場をやっていくとか、コンサートや演劇をやる、色んな映画がやられている映画館でもあるとか、そういうパフォーミングアーツを含めたシアターとライブラリーが限りなくイコールであるという場を、このヘルシンキモデルだったら作れるわけですよね。音楽があって、工房でもある、こういうものが図書館なんだという再定義が必要だと思うんです。ライブラリーは、中島委員がおっしゃったように、単に知を消費する空間ではなく、知を作る空間であり、その知は文字や活字だけから成っているわけではなくて、映像でもあり音でもあり、音楽でもあり、そしてもっと言えば「私たち自身が本なんだ」ということですね。だから私たちの体の中には、DNA や子供の頃の記憶、それからお父さん、お母さん、おじいちゃん、おばあちゃんのある種の記憶、あるいは昔住んでいた場所の記憶が、思い出せないんだけど、身体の中に溜まっているわけですよね。だったら、一人ひとりの人間がやはり書物であるとするならば、この生きている書物と書物が出会う場所は図書館であるとするならば、無数の書物が集積されて出会っていく場所は図書館であって、単にパブリッシュ、大量生産された本がたくさんストックされて公共的に提供されている場所が図書館などではないという図書館の再定義をすれば、当たり前のように図書館はシアターでもあり、カフェでもあり、シンポジウムの場でもあり、コンサートホールでもありクラブでもありというような、そういう場として、パブリックナレッジをクリエイトする空間の実験場なんだという、そういう風な再定義を大っぴらに、真っ正面からやる。

日本の官僚システムの中で理解してもらうのは大変かもしれないけど、世界は理解する

と思います。英語で発信し、世界に訴えれば、世界は、その intellectual は簡単に理解すると思うので、それで賞まで取ってしまえばこっちのものですが、楽観すぎると思われるかも知れませんが、最善を尽くすということで、その方が良いのではないかと思います。

最後に、今日 2 回目で色んな議論出しをしました。次回以降少しまとめていく形で進めなくてはいけないので、今日出していただけることがあればご発言をお願いいたします。

【浅川委員】

一言だけ。先ほどの事務局からの対象についての質問ですが、多分高齢者と小学生、中高生と求めるところが違うと思うので、ターゲット層を決めるのは確かに難しいと思います。しかしながら、新しいライブラリーに対して、様々なターゲット層に対してどのように参画を求めていくかという戦略を持つことは必要だと思いました。

【吉見座長】

ありがとうございます。他に最後のご意見何かございますでしょうか？

【田中里沙委員】

対象者はそういう好きなことを広げたいなとか、誰かと一緒に何かを作ってみたいなとか、何か面白いことないかなとか、そういうふうな気持ちを持っている方々、活用される目的ベースで検討してもいいのかなっていうような気がします。

【田中元子委員】

個人的な意見ですが、私は、全員が作り手とか、活躍するとかではなくて良いと思っています。大人しくて交流を望まず、静かな時間を楽しむ人が幸せに生きることも素敵なことです。だから、「生きる人全員が輝いて」とは思わないです。「日本女性全員輝け」みたいな政策が打ち出されると、「輝いていない人はどうなるの？」と思ってしまいます。そういう、夢や目標、やりたいことが特にないことがいけないように扱われることも凄く問題だと思っていて、目的や成長と言ったキラキラムードのない人も、何となく行きたくなる居場所になることが、孤独や分断等を防ぐ意味では凄く大事かなと思います。

【中島委員】

日本で「作る」という言葉や意味合いはニュアンスが独特ですよね。キラキラしてしまう。そういう意味ではなく使っても、凄く疲れてしまうこともある。緩やかな「遊び場」

で、作り手にもなれることが、わくわくする言葉で発信できるといいかなと思います。

【吉見座長】

ありがとうございました。これから図書館の基本構想を作っていくところでは、まだまだ色々あると思いますが、方向付けるという意味では中核的なお話を充分いただきました。丁寧に要旨と議事録を起こしていただいて、少しブラッシュアップする形で、最終報告を決議したいと思います。事務局から今後の進め方、段取りをご説明いただけますか。

【事務局】

３回目は今日の議論を踏まえて、コンセプトとして新しい言葉にまとめたものや、最後のまとめの手前の段階のまとめといったところで進めさせていただければと思います。

【吉見座長】

ありがとうございます。3 回目は 9 月 21 日ですよね。それで、この会としてはかなりファイナライズに近いってことでございますね。

【事務局】

第４回目が本当の意味のまとめですが、このようにほとんどの人が集まれず、ひとりだとか、2 人だとかでやる形になってしまうので。

【田中元子委員】

ヘルシンキの図書館もすんなり合意形成して作られた訳ではなく、相当戦って攻めて踏み込んでやっとできたものだと思います。ぜひ思いっきりチャレンジしてみてください。

【吉見座長】

130 ぐらいのことを言って 40 か 50 実現すれば、10 や 20 でもね、ゼロよりはいい。そういう風に進めていただければと思います。以上で今日は終わりにさせていただきたいと存じます。どうもありがとうございました。失礼します。